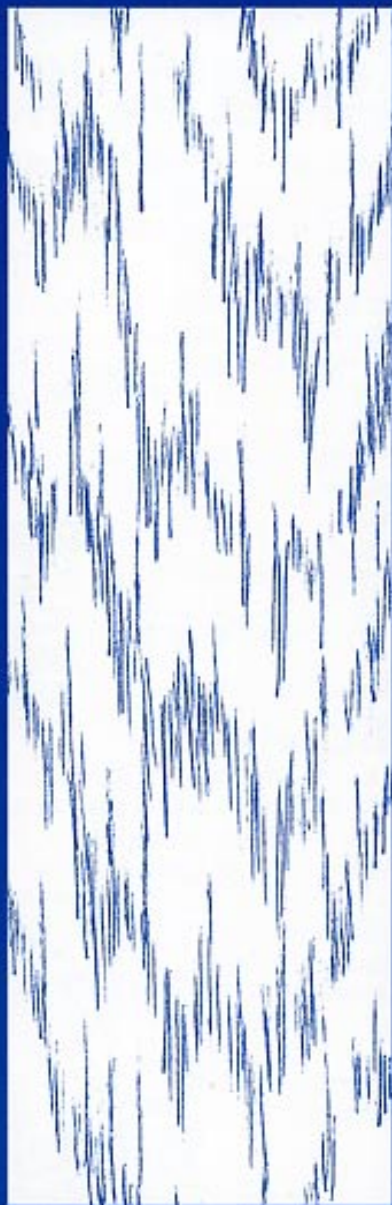


# 船団



● 第80号 特集Ⅱ 高柳重信—戦後俳句の夢

## 古池の句新釈

坪内 稔典



して有名だ。というより、俳句の世界的サンプルがこの句だと言うべきか。ともあれ、俳句としてもっとも知られた句がこの古池の句である。

この句については、近年、長谷川權が『古池に蛙は飛びこんだか』（花神社）を出しその古池の句の新釈が話題になった。長谷川は、古池の句が「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」と読まれてきたことに異議を唱えたのである。この読み方では、切れ字の「や」を活かしていない。それにこの句は「蛙飛びこむ水の音」が先にできたのであり、「古池や」は後からつけられた。つまり、下句と上句は別次元（あるいは別世界）にある。

それは二〇〇七年四月のことだった。和歌山市の国道26号線紀の川大橋の拡張工事で意外なトラブルが発生した。近くの住宅の床下から水が噴出したのだ。床下には今はもう使わなくなっていた井戸、すなわち古井戸があった。工事の影響で、その古井戸が命を吹き返したのである。

このニュース、新聞やテレビで報じられたが、そのときはたと膝を打ったことがある。

古池や蛙飛びこむ水の音

この芭蕉の句は、彼が自身の俳境（蕉風）を開いた句と

蛙が水に飛びこむ音が聞こえる

古池がある

と示しているが、この心の動きはおかしいのではないか。

芭蕉の句は、まず「古池や」と読むから、その途端に読者の頭には古池が浮かぶ。そしてその古池に、「蛙飛びこ

む水の音」という次の光景が現れる。この句、句の意味としては、「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という通説通りでいいのだ。長谷川のような読み方をしたところで、この意味が大きく変わるわけではない。長谷川が先に下句を読むのは、やや強引であろう。読みの自然な流れを壊している。それに、古池が心の池だ、というのも観念的。心の池なんていう観念よりも、現実の具体的風景に詩を見出したのが芭蕉だったのではないか。「奥の細道」に出てくる句などは、まさに現実の具体的風景だ。

さて、冒頭の子井戸の話である。大輪靖宏編『江戸文学の冒険』（翰林書房）に「江戸時代の文芸の新しさ」という論文があり、古池の句の新釈を示している。大輪は、古池を単純に古い池と受け取ってはいけなと言い、古井戸を例に挙げる。「いまでは誰からも顧みられなくなった井戸」が古井戸であり、実は古池も同様だ。古池は「あらゆる生物たちから見捨てられた死の世界」であり、「音も動きもない」。その古池に、「蛙飛びこむ水の音」がする。「忘れられた世界が急に生きたものになる」。

佗び、寂びというのは完全なる死の世界ではない。生きている現実世界の中に生じる雰囲気を目指すのだ。芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」という句は、古池という死の世界になりにかねないものへ蛙を飛びこませ

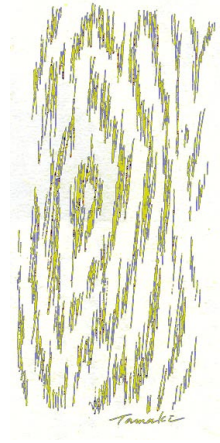
ることによってそこへ生命を吹き込み、顧みられないはずのものを生きた世界にしたのである。生きた世界だからこそ佗び、寂びが生じたのだ。

以上のような大輪の意見が頭にあり、それで紀の川の古井戸事件に膝を打った。『江戸文学の冒険』の奥付にある発行日は二〇〇七年三月三〇日。紀の川の古井戸事件が話題になったちようどそのころ、私はこの本を読んだのだった。

「古池に蛙が飛びこんで水の音がした」という通説の読みは、この句を閑寂な風景として読むものだ。蛙の飛びこむ音がして、その後さらに深い静寂が広がった、と。大輪の読みはそのような静寂を読むのではない。命の蘇り、すなわち、春の到来した活発な生命感を読む。

古池の句に春の訪れを読んだ人は、実ははやくにいた。高浜虚子である。彼は一九五五年六月、この句は「啓蟄の頃になつて、今まで地中にあつた虫が一時に活動をはじめる」光景の一つだと述べた。「沈潜してゐた古池の水も温みそめ、そこに蛙が飛び込む。そのことは四時循環の一つの現はれである。天地躍動の様である」。この虚子の言葉は『虚子俳話』（一九六三年）に収められているが、虚子の読みの延長上に大輪の新釈が現れた、と言ってよいだろう。

# 会員作品



坪内 稔典

時雨来て湖心の魚の目の目のつぶら  
綿虫の三粒に会って戻ったよ  
冬の日の男とアメリカバイソンと  
ころがして仏頭を彫る冬の虹  
雪が来るコントラバスに君はなれ  
おとなりはハイネ氏一家柿落葉  
化石掘る十一月の終わりの日

中原 幸子

前籠に紫苑息子の名は翔太  
小芋ころん水質汚濁防止法  
真夜中に起きてもの食う子規忌かな  
十三夜われわれという一人称  
星月夜いいえ落ち着いたりしません  
全力をアイロンに乗せ神の旅  
ケータイの圏外に座す一葉忌

火箱 游歩

岡本 高明

野菜サラダ兎のように食い良夜  
留守番の黒猫に月がまんまる  
台風の目の中青いスベリ台  
十月を東京バナナぼんやりと  
そのひとの土の匂いの爽やかな  
日本の秋の真昼の穴ぼっこ  
ひやひやとバツタの貌の拡大図

食するとき齡見られしきりぎりす  
くつくつと国栖人笑ふ熟柿掌に  
西条の帯に耐やる父あれば  
病室の煤払ひなり立つて待つ  
この川に妊むものあり初しぐれ  
竹馬の丈に小旅の思ひあり  
寒鯉の頭を蹀の過ぎゆけり

陽山 道子

宮崎 亀

フライパン洗ったばかり夕月夜  
立冬の湖上に光る櫂の先  
冬青空細い腕にも力瘤  
青石の階段濡らし時雨いく  
リビングの真ん中通る海鼠かな  
結び目をほぐしていたよ冬夕焼  
綿虫やこの頃いかゞお過ごしで

昼過ぎの鉄条網にばった居る  
撫子と道にまよいて遇いにけり  
くんくんと膝を嗅がれぬいわし雲  
耳厚く美味そうな毒きのこなり  
赤まんま里に廃れぬ小道あり  
灯台のともしび得たる根釣りかな  
おにぎりの中の塩昆布秋深む